

硯	文科二部一年	蚊	泉	靖子	五六
(短歌)					
伊香保にて		柴		舟	五七
をりにふれて		吉永	ふみ		五八
熊祭りを見て		河崎	なつ		五八
題いろく					五八
偶感					
自己に對する解決	文科三年	江藤		馨	六七
報					
第廿五回文科學術談話會					七四
第四回會計報告					七四
交詢					
母校日より		堀尾	ごめ		七五
熊本より					七七
福岡より		八尋	かめ		七八
岡山より		井淵		英	七九
稟告					

文科學術談話會々誌

第五號



講演

●潜在意識 (Sub-consciousness)

文科四年 源

意識といふのは一言で説明すれば我等の智情意全体の働であります。吾々が熱心に勉強してゐるときそれがその瞬間の意識作用であります。病める友達の身の上について切りに同情をよせてゐるそれもその時の意識作用であります。凡てその時の心の働全体がその時の意識作用であります。然らば潜在意識とは何をいふか、元來吾々の精神といふは吾々が自覺する事のできる範圍換言すれば普通心といふそれ丈の範圍と思つてゐました然るに近來比較的新しい心理學 The New Psychoology 於ては吾々の精神作用といふものは吾々の意識に上る範圍丈のものではなく吾等自身の知らぬ奥深いところにも潜んでゐて知らず識らず大なる働をしてゐる。吾々は普通心といふものよ

りは却て大部分これによつて動かされてゐるといふが事云はれてきましたこの潛んでゐる精神作用を名づけて潜在意識といふのであります。

思ふに十九世紀の自然科学勃興の時代から心理學も亦その實驗的方面に非常の進歩をして特にドイツのヴント Wundt (1832) 教授以來心理學は自然科学の立場から何でも實驗に徴して科學的説明を與へようとして科學的説明の及ぶ範圍の外別段不可思議な神秘境をみとめないといふのがむしろ近世一般の傾向でありませう。然るに潜在意識といふ様な一種神秘的の傾向を持つてゐるものが何時の頃から又如何なる人によつていはれたかその由來をたづねて見ますならば凡そ東洋の哲學に於ては元より潜在意識の名は用ゐられてありませんけれども暗々裡のうちに大にこの思想が含まれてゐたかと思ひます。或る人は所謂 The New Psychology は遠くインドのパラモン教に胚胎する物であると云つてゐるとか又ある學者は唯識論をひいてその思想中に含まれたる潜在意識の意味を示してゐます。西洋の哲學思想の中にも古くから潜在意識に似かよつた考がありましてそれが十九世紀に於て發展してハルトマン Hartmann (1842—1906) の哲學となつた様に思ひます。それが幾分科學的に又潜在意識の名を以て云はれましたのはこれ誠に新しいことでありまして即ち千八百七十年の頃からイギリスの學者シヂュキツク Sidgwick (1838—1900) とその友人マイヤース Myers (1843—1901) とから云はれました。特にマイヤースは最熱心にこれが研究に當りましてシヂュキツクも「マイヤー

スが心理學に新問題を附與してから潜在意識の研究はマイヤース問題として永く心理學界の異彩となる運命を有す」と云はれたといひます。後なほこの問題に就きましたは幾多の研究者を出しましたが中に就き最世界の耳目を惹きましたのは彼の有名なるアメリカのウイリアム・ジェームス William James (1842—1910) 教授であります。氏が千八百九十年に大著 The Principles of Psychology をだしましてこの中に潜在意識につき詳説するところあり（尤氏は無意識の名を用ゐる潜在意識の名は用ゐざりしとのことなれど）それ以後今日に於ても潜在意識といへばジェームス教授を以てその首唱者とする様に思ひます。現今我が國におきまして或る一部の心理學者及文學家宗教家等の著述の中には往々にして此問題をみるのであります。然し一般の心理學者にはこの問題は不幸にして認められてゐないのであります。それはつまり空虚論であるからではなく私はむしろあまりに深遠なことであつて今日の自然科学では未だ十分研究を遂げることが出来ないからではないかと思ひます。他日この方面の研究が進んだ曉にはこの潜在意識などいふことから或は前代未發の大問題を惹き起す様なこともないとも限らないと思ひます。

右の様な次第でこの問題は極めて新しい研究にかゝることで學者間にさへも議論のあることでありますから私如きものがかくかくのものと科學的説明をすることは元より出来ません。たゞ私は少し許の讀書によつて得たところのものゝ中重なる例をぬき出して御紹介するにすぎません。

さて心理學に説いてある潜在意識といふものは極めて科學的であります。一二例をあげますと吾々がかつて自分の知つてゐた人に出逢つて突然その人の名を忘れる。そのとき吾々はどうかして思ひ出さうとつとめるけれどもどうしても思ひ出せぬ。そのときの心理状態を考へてみますと吾々の心の中に何か空隙ができた様で非常にも足らぬ氣がする。そして何か其人の名以外の名辭がでてきてその空隙を満たさうとすると吾々の心は之を拒絶してよせつけぬ。その人の眞の名が思ひ出されたとき始めてさつぱりして物足らぬといふ感じはなくなる。そしてその物足らぬといふ感じはそのものそのものに特有な感じであるこれが潜在意識のはたらきである。なせならば右の例においてその人の名は潜在域に潜んでゐるために思ひだせぬが然しその人の性質とか言語とかの觀念は潜在域にあらはれて潜在域にある名の觀念と連合運動をして切りにこの名の觀念と潜在域から顯在域に惹き出さうとする名の觀念自身も亦どうかして潜在域から頭をもち上げて顯在域に出ようとするけれども或る事情の下に妨げられて名の觀念は顯在域に出てこない即思ひだせぬ。そこで一種の物足らぬ感じがし又他の名がでて來ようとするのを拒絶するのである。もしこの時識域以下に於ける潜在的活動がないとするならば思ひだせぬときにどうして物足らぬといふ感じがしよう又他の名がでてくるときに之を拒絶する働がありません。こゝに於て吾々は潜在活動といふことを認めねばならぬとかういふのであります。之がジュームス教授又我が國の福來博士なども云つてをられる潜在

意識に對する説明の一例であります。

又平素友達として交つてゐてそれ程深く親愛してゐない間柄でも一旦離別したときつよき親愛の情を増すとがある。これも亦潜在意識の活動に歸してよいといふのでございます。即吾々が友達に逢つてゐるときには自分がその人に求めるところは求めると隨て飽和してそして一寸した氣に入らぬ惡感情に自覺域は占領せられて或は不足に思ひ或はわがまゝをいふ。ところが一旦離別してしまふと其人の吾々に向つて不適當なところは目前にないから惡感情は起らない許でなくさきに交つてゐたときに友達が自分にしてくれた數々親切な行爲がさきには潜在的に潜んでゐたものがこのときに當つて猛然顯在域にあらはれてきて非常になつかしく思ふ「あるときはありのすさびにかたらはで戀しきものとわかれてぞ知る」とはまさにこの心的事實を歌つたものであるといふことがありません。吾々が平素親の膝下にあるときにはいくら親の恩は廣大なものであると聞かせられても割に深くは感じません。それが四年もかうして離れてゐるうちに始めて親の恩といふものゝ廣大無邊なことがわかるこれも亦親のそばにあるときにその恩が全くわからぬではないけれども幾多親の親切といふものは吾々のわがまゝの心から潜在域に潜んでゐてその上にもその上にもと色々わがまゝをいふそれがわかれて始めて今迄の潜在活動が猛然として顯在域にあらはれ凡てのわがまがとれるからこれよりの親のしうちが事々に感謝せられるといふものではありますまいか。

又吾々が寝るときに明朝は何々の用があるからいつもよりは一時間早く起きねばならぬと思念してねるとよくねむつてゐるにもかゝらず大抵その頃には目がさめる之について博士ウースターといふ人は「自分がかつてある大學の牧師をつとめてゐたとき職務上普通起きる時刻よりも一時間早く起きねばならぬことなつたはじめのうちには目ざまし時計を用ゐたがのち之をやめて六年間のうち遂に自分はたゞ一朝寝すぎた丈でその外にはいつも必要な時間よりは五分又は十分まへに目をさますことができたといつてゐます。それはとにかく私どもにもこれに類した事が實驗せられる場合があるのであります。これ畢竟意識は寝てゐてもかつて印象したことが潜在界に潜んでゐてそのときねむつてゐるにもかゝらず目をさまするものではありませんまいか。

更らに他の例をとりますならば人生の機微を穿てる文章詩歌などを吾々がきくときはその意味が深長で滾々としてつきない趣味があるのを深く感ずる。もし此の時人あつて汝は此文章の如何なるところが如何に書いてあるから左様に深く感ずるかを説明してみよと云うたらその理由を明かに話せる人はすくなからう。これ自分がかゝる方面について理解し感ずる丈の能力は精神の奥深いところ存在してゐて自分がその文章なら文章をきくときに潜在意識として黒幕内に活動してゐて大に感じさせる。しかし惜いかなこれが潜在界での働であるから吾々には何故に感心するかを理論的に述べることはできぬとかういふのであります。凡て我々が直覺とよんでゐるものもかくの如く説明

してよいかと思ふのであります。

その外吾々が習慣と呼んでゐますものも始は意識的努力を要したにしろ後には潜在的に潜んでゐて一々意識作用を働かせないで知らず識らず我々を動してゐるものでありませう。

以上述べましたところで吾々は幾分潜在意識と云ふものが解りました。然し右潜在意識の説明は甚科學的の部分である。未だ淺薄である。吾々が潜在意識といふものを更に委しく調べてみようとするならば遂に今の心理學の外一步をふみ出して今少し神秘境へ足を入れねばなりません。私はいからその方面について少し御紹介致しませう。

元來吾々共の意識作用に上る心といふものは誠に少ないものであります。吾々の精神作用と云ふものは普通心と云つてゐるものゝ外向大なる世界があります。丁度大太平洋上の島が一の山の巔であつてその麓は水面下幾メートルも下に潜んでゐると同様に私どもの潜在意識といふものは普通心といつてゐるものゝ下幾メートルにも達してゐて普通心のはたらきよりは一層大きくて力がつよくて日常吾々を動かしてゐる大部分はこゝから沸き出てゐるのではありますまいか。然したれも大太平洋上の島に立つて自分は山の頂上に立つてゐるのだとは氣かつかぬと同様に吾々は意識の水平線下幾メートルかの潜在意識の上に立つてゐる淺き心といふもの丈でこれが心全体かと思ふ。しかし案外人は偉大なものである。その作用を考へてみますと彼の俗にいふ虫が知らせると云つて大事の起

んとするときその事がまだ起らぬさきに何か不思議の暗示がある。忠臣藏に戸田の局といふのが自分の主人のはかなき最期に無念の思がわき出て一夜ごうしてもねられない。色々悲しい事を思ひついで翌朝夜が明けて昨晩は不思議な晩であつたと思つてゐると女中がきて昨晩遂に敵討をする事ができたとしらせたといふ話がある(これは高島平三郎先生の修養心理學講義にある例)その他旅へでも出てゐるとき親が急に死ぬといふ様な事があると意識的には何も解らぬが不思議の暗示があつて心配してゐると翌朝知らせがきたなどいふ例は少くないのであります。これをどういふ風に解決させようか。私はこれに對し私に下の如きことを考へるのであります。吾々の靈妙なる大精神といふものは絶対に物理的法則のみで壓し去ることはできないごうしても科學的説明の及ばぬ範圍があるこの頃所謂醫術もしらず藥も用ゐずしていろく病氣をなほすといふ。これ強ち一笑に附し去ることのできぬ場合がある。これに對して或人曰く「畢竟宇宙の現象といふものは唯一心の發現にすぎない一心凝つてはじめて物質なる諸現象が自由自在に左右せられるのである。心の本体とは何かといへば無念無想無我の境涯である。心に何かものがあると個性の働になつてしまつて宇宙の大精神に合する事が出来ない個性が働いてゐる時に他人の心などを感知することができない、個性を消滅してしまつて宇宙の意志と合したときこそ他人の心も凡て感知することができから病氣も治せる」。私はかゝる説がいかなると場合でも亦いかなる人にも信せらるべきものとは勿論思ひませ

ん。しかし吾々は往々にしてかくの如く想像せられる場合もある様に思ふ。とにかく吾人の精神の全奥底即ち潜在界には宇宙と共通したところ、宗教家であるならば之を神と交通するところと申しせう哲學者であるならば或は之を宇宙の意志と合するところを申しませうがかういふ世界があつて普通の意識作用のみの働以外の作用がいとなまれるのではありますまいか。西洋のキリスト教の方でよくいふ小我を滅して宇宙の大我に復活するとか東洋の方で坐禪をして妄念妄想を殺して眞の自我を發揮させるとかいふのも要するに心の奥にある是等の潜在意識と云ふものを發揮せようとするものとの解釋する事も出来ようかと思ふのでございます。又吾々が極熱心に或る事をしてゐるときその熱心が最高點に達すると我を忘れて全く夢中になつて事をする。そのときした仕事はあとでみると實に立派なもので我ながら感心するといふ様なことがあるある人はこれについてかう云つています「吾々が大きな仕事をするときには意識的努力をすぎ去つて所謂自動的の状態にあるのでなければ換言すれば潜在意識の働にまかせるのでなければ駄目だ」と云つてゐます或は又熱心でなくとも吾々が非常の出来事に遭遇して危機一髪といふときに心身振動して思慮を廻らす暇なく揮身の力をふるひ出して猛然として或る處置を斷行するあとで考へてみて我ながら實に感心することがある理性などで考へてやつてゐたらとてもできない様な仕事をするところがある昔南朝の天子が賊に迫られて賀生に免れ遊ばしたときに伊賀の局といふやさしい女が松の木を手折つて流に架したと云ふ

のもやはり潜在意識が猛然として迸出したのではありますまいか。更に潜在意識の研究は醫學者の方から往々有力な報告が得られるのであります或る醫學者の報告によりますと吾々の心の奥即ち潜在界には恢復修理の元氣が旺盛なものであつて吾々が病氣にかゝり又はあるところを負傷をした時に實は醫者の藥といふものはほんの氣やすめにすぎぬもので多くは自然に内部から恢復修理せられてゆくのだ此作用に對して人々は「それは人間の生理的作用だ」といふかも知れぬが我々の組織体を仔細に検査してみたならば是等種々なる病氣をなほす様に十分複雑に且つ普遍的にはできてゐないからこの作用は潜在界にある恢復修理の潜在意識の作用に歸するより外に仕方がないと云つてゐます。私はこれに對してどうとも云ひ得ませんが或はそういふものかも知れません。

以上心理的又は宗教的神秘的方面から潜在意識といふものがどんな風ていはれてゐるかといふことを少し許り御紹介致しました。尙ほこの外この問題につきましても色々な議論もありませうけれども今こゝに多くを云ひ得ませんが要するに今日におきましては科學的に結論を下すことはできません。

なほ最後は一言附け加へて置きたいことがあります。前の如く申してきますれば潜在意識の働は實に廣大なものであると思ひます。併しながら明に意識に上らぬ事でありますからこれに就いて何人にも納得させる様に證明することは出来ません。従つて人々がコウダラウと推定する丈で要するに想像的の解釋である、それ故に普通の心理學や倫理學上の道理を潜在意識に關する推測で無にする様なことは元より正しいことではありません。私共の態度としては飽く迄も今日の學術上の研究を尊重しこれを補ふる間に潜在意識を借りて説明すべき様の場合もあるといふ丈であります。(完)

◎民間年中行事由來

序 説

文科四年

堤 淺田 房野
廣 間 ひ で

年中行事の由來に就きては異説多し。かくの如き事は固より故實家の研究を待つべきものにして、我等の徒の到底究め得る所に非るなり。されば茲には單に常識的方面より諸姉の御參考にもと思ひ次の民間年中行事の主なるもの

一月 年始祝雜(注連繩。門松。屠蘇。鏡餅。萬歳)七種粥。十日夷子。藏開き。左義長(爆竹)十五日粥。

二月 彼岸。初午。涅槃會。

三月 上巳。雛祭。